

大学生の職業的価値意識

猿渡 壮

1 はじめに

仕事に何を求めるかは人によりさまざまである。待遇の良さを求める人もいれば、給与は悪くても自分の好きなことを仕事にしたいという人もいる。できるだけ楽な仕事をして暮らしたいという人もいるだろう。本稿では、大学生が仕事に対してもつこうした意識について検討していく。主に検討されるのは、大学生がもつ職業的な価値意識が就職活動のありようにどうかかわっているのかということや、大学での生活が学生たちの職業的価値意識にどう結びついているのかということである。

分析には、2012年3月21日に実施された同志社大学社会学部卒業時調査から得られたデータを使用する。この調査は同志社大学社会学部を卒業する学生を対象におこなわれたものであり、有効回答数は350人。分析には、このうち就職活動経験のあるケースのみを使用している。

本稿の構成は以下の通りである。まず、学生の職業的価値意識の分布と構造を確認し、職業的価値意識と基礎変数の関係を明らかにしていく。次に、職業的価値意識と就職活動の関係について見ていく。ここでは、職業的価値意識が就職活動量や内定数、進路満足度にどのような影響をもたらすのかが分析される。最後に、大学生活での諸経験や、そこで得られた教養などが、学生の職業的価値意識にどうかかわっているかが分析される。

2 職業的価値意識の3類型

2.1 職業的価値意識の分布と構造

今回の調査では、就職活動を始めた時期、企業を選ぶ上で何を重視していたがたずねられている。表1は、「大企業や有名企業であること」「給与がよいこと」「残業が少ないこと」「仕事内容の面白さ」「福利厚生が充実していること」「長く勤められる会社であること」「自分の能力を発揮できること」の7つを、学生がどの程度重視していたかを示したものである。なお、表の平均の列には、「重視していた」に4点、「少し重視していた」に3点、「あまり重視していなかった」に2点、「重視していなかった」に1点を与えたときの各項目の

平均値が記されている¹。

表からは、「残業が少ないこと」を除く 6 つの項目については、いずれも「重視していた」や「少し重視していた」という回答が多いことがわかる。学生は仕事に関するこれらの要素をおおむねどれも重視している傾向にある。平均で見ると、7 つのうちで学生がもっとも重視しているのは「仕事内容のおもしろさ」である。次に学生が重視しているのは「自分の能力を発揮できること」「長く勤められる会社であること」であり、「福利厚生が充実していること」「大企業や有名企業であること」「給与が良いこと」「残業が少ないこと」と続く。

表 1 職業的価値意識の分布 (%)

	重視 していた	少し重視 していた	あまり重視して いなかった	重視して いなかった	合計(N)	平均
仕事内容の面白さ	60.3	31.0	7.7	1.0	100.0 (297)	3.505
自分の能力を発揮できること	39.9	44.0	11.1	5.0	100.0 (298)	3.188
長く勤められる会社であること	44.0	36.6	12.8	6.7	100.0 (298)	3.178
福利厚生が充実していること	33.8	42.1	18.1	6.0	100.0 (299)	3.037
大企業や有名企業であること	29.4	41.8	18.4	10.4	100.0 (299)	2.903
給与が良いこと	27.8	41.8	22.1	8.4	100.0 (299)	2.890
残業が少ないこと	11.7	29.5	39.6	19.1	100.0 (298)	2.339

表 2 は、7 つの項目による主成分分析をおこなった結果である。

表から、職業についてのこれらの意識が 3 つのグループに分類されることがわかる。第 1 主成分に高く負荷しているのは「福利厚生が充実していること」「長く勤められること」「残業が少ないこと」の 3 つである。これらはいってみれば、労働条件が安定した職場で長く働きたいという意識である。よって、第 1 主成分は「安定志向」を表す軸と考えていいだろう。第 2 主成分に高く負荷しているのは、「大企業や有名企業であること」と「給与が良いこと」の 2 つである。これらはいずれも、社会的ステータスの高い企業で働きたいという意識である。よって、第 2 主成分は「ステータス志向」の軸と考えられる。第 3 主成分に高く負荷しているのは、「仕事内容の面白さ」「自分の能力を発揮できること」の 2 つである。働くことの面白さや仕事を通じた能力の発揮は、いずれも仕事のやりがいにかかわる要因といえる。よって、第 3 主成分は「やりがい志向」を表す軸と考えていいだろう。

以上のように、職業的価値意識に関する 7 つの項目は、安定志向、ステータス志向、やりがい志向の 3 つに分類することができる。以降の分析では、表 2 の主成分分析から得ら

¹ 職業的価値意識に関する以降の分析では、すべてこの方法で得点化した変数を使用している。

れた第 1 主成分得点を安定志向の尺度として、第 2 主成分得点をステータス志向の尺度として、第 3 主成分得点をやりがい志向の尺度として使用することにしよう。

表 2 職業的価値意識の主成分分析

	第1主成分	第2主成分	第3主成分
福利厚生が充実していること	0.868	0.138	0.062
長く勤められる会社であること	0.727	0.109	0.149
残業が少ないこと	0.699	0.152	-0.041
大企業や有名企業であること	0.108	0.884	-0.044
給与が良いこと	0.250	0.832	0.046
仕事内容の面白さ	0.002	0.119	0.844
自分の能力を発揮できること	0.120	-0.121	0.799
固有値	2.362	1.393	1.042
累積寄与率	26.548	48.787	68.535

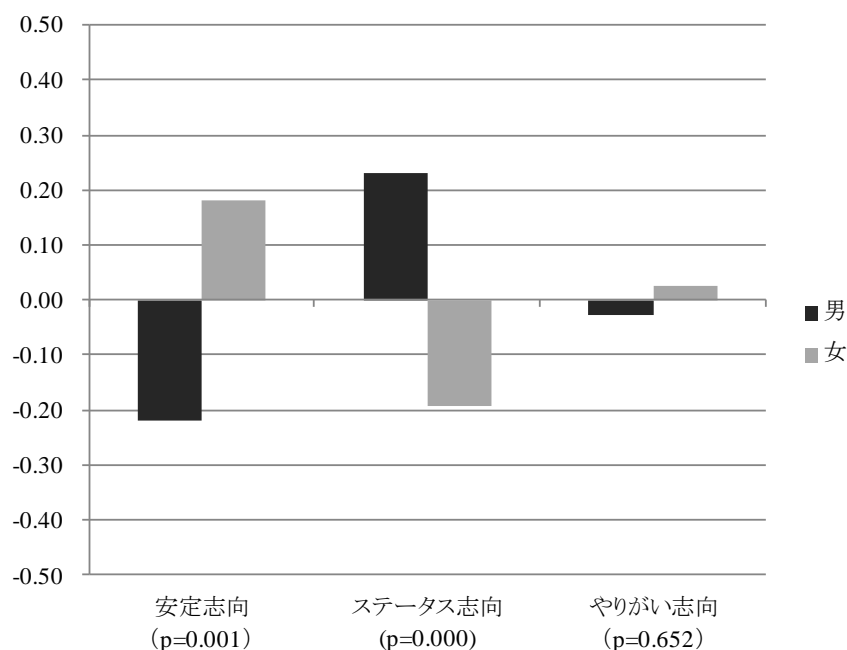
2.2 職業的価値意識と基礎的変数の関係

(1) 性別

性別や学科といった基本的な変数と職業的価値意識の関係について、ここでまず確認しておこう。

図 1 は、3 つの職業的価値意識と性別の関係を明らかにしたものである。これを見ると、女性は男性よりも安定志向が強く、ステータス志向は男性よりも弱いことがわかる。また表からは、安定志向やステータス志向とは異なり、やりがい志向については男女間であまり差が見られないことも見て取れる。仕事内容のおもしろさや仕事を通じた能力の発揮は、男女とも同程度に求めているのである。

図 1 性別ごとにみた職業的価値意識の平均

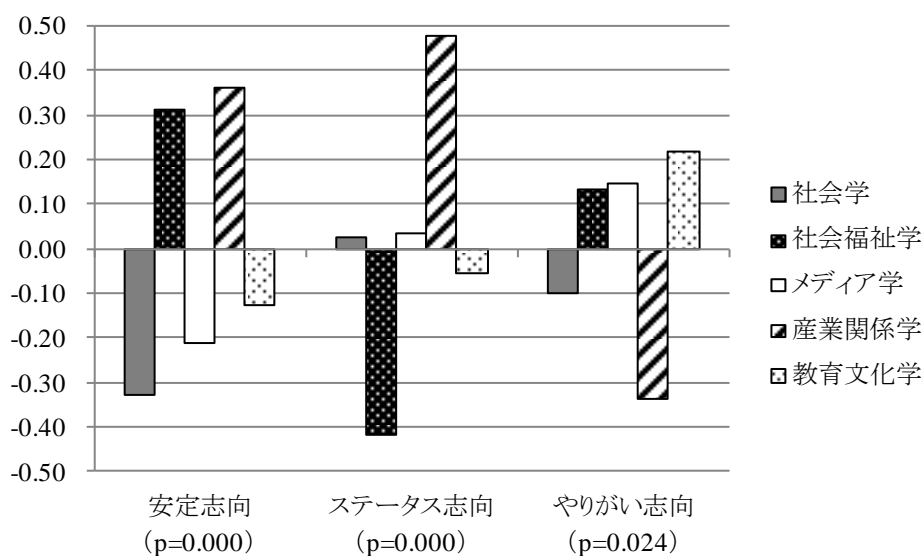


(2) 学科

次に学科について見ていこう。図 2 は、3つの職業的価値意識の平均を学科ごとに示したものである。

安定志向が強いのは産業関係学科と社会福祉学科の学生であり、社会学科、メディア学科、教育文化学科の安定志向は平均よりも低い。ステータス志向が強いのは産業関係学科の学生であり、社会福祉学科の学生はステータス志向が弱い。社会学科、メディア学科、教育文化学科のステータス志向は平均的である。やりがい志向については、教育文化学科、メディア学科、社会福祉学科が平均よりも高く、産業関係学科、社会学科は平均より低い。仕事を選ぶ上で重視することがらは、このように学科によっても異なるようである。

図 2 学科ごとにみた職業的価値意識の平均



3 職業的価値意識と就職活動

安定志向、ステータス志向、やりがい志向といった職業的な価値意識は、就職活動のありようとどうかかわっているのだろうか。ここからは、学生が職業に対してもつこうした意識が就職活動や進路満足度にどう影響しているのかを明らかにしていこう。なお、以降の分析では、性別や学科と就職活動の関係についても見ていくことにする。

3.1 就職活動の量

調査では、就職活動中にいくつの企業にエントリーシートを提出したかがたずねられており、回答者にはエントリーシートを提出した企業数を実数で回答するよう求められている。また、いくつの企業で人事面接を受けたかということについても同様の方法でたずねられている。表 3 は、エントリーシート提出数、面接数の平均を、性別および学科ごとにみたものである。

エントリーシートについては、男女で提出数にあまり差がないこと、学科によって提出数に違いがあることがわかる。エントリーシートをもっとも多く提出しているのはメディア学科の学生であり、約 46 社。社会学科 (約 44 社) と産業関係学科 (約 41 社) がそれに続く。これらの 3 学科と比較すると、社会福祉学科 (約 29 社) や教育文化学科 (約 25 社) はエントリーシートの提出数がかなり少ない。

面接についても同様の傾向を読み取ることができる。面接数は男女ではあまり差がなく、

学科による違いが見られる。面接数をもっとも多いのはメディア学科の学生（約 25 社）であり、産業関係学科（約 20 社）と社会学科（約 19 社）がそれに続く。社会福祉学科（約 15 社）や教育文化学科（約 18 社）はここでも他学科より少ない傾向にある。

表の右列には、性別・学科ごとに見た就職活動量の平均が記されている。ここでは、エントリーシート提出数と面接数による主成分分析から得られた第 1 主成分得点を、就職活動量についての変数として使用している²。全体的な就職活動量についても、やはり性別による差はみられない。男性も女性も、量的には同じくらい就職活動をおこなっているのである。学科は就職活動量と関連しており、もっともたくさん就職活動をおこなっているのはメディア学科の学生、次が産業関係学科と社会学科の学生であり、教育文化学科と社会福祉学科の学生は活動量が低い。

表 3 性別・学科ごとの就職活動量の平均

		エントリーシート 提出数	面接数	就職活動量
全体		38.6	19.8	0.000
性別	男	37.6	20.4	0.021
	女	39.7	19.2	-0.020
	有意確率	0.585	0.576	0.762
学科	社会学	44.0	19.4	0.111
	社会福祉学	28.8	15.4	-0.399
	メディア学	46.0	24.8	0.311
	産業関係学	40.8	20.0	0.123
	教育文化学	25.4	18.0	-0.373
	有意確率	0.066	0.002	0.002

次に、職業的価値意識と就職活動量の関係について見ていこう。表 4 は職業的価値意識とエントリーシート提出数、面接数、就職活動量の相関を見たものである。ここから、安定志向はエントリーシート提出数、面接数、全体的な就職活動量と正の相関があることがわかる。安定的な労働環境で働きたいという意識意が強いほど、就職活動をたくさんおこなう傾向がある。ステータス志向はエントリーシート提出数、就職活動量と正の相関があり、係数は少し小さいが、面接数とも正の相関関係にある。社会的ステータスの高い企業で働きたいという意識も、就職活動量を高めることがわかる。やりがい志向については、

² 寄与率は 86.8%。

エントリーシート提出数、面接数、就職活動量のいずれとも相関がみられない。仕事内容の楽しさや能力の発揮を求める意識は、就職活動をたくさんおこなうかどうかということには関与しないようである。

表 4 職業的価値意識と就職活動量の相関

		エントリーシート 提出数	面接数	就職活動量
安定志向	相関係数	0.209	0.162	0.202
	有意確率	0.001	0.016	0.003
	N	233	223	218
ステータス志向	相関係数	0.197	0.124	0.185
	有意確率	0.003	0.065	0.006
	N	233	223	218
やりがい志向	相関係数	0.023	0.073	0.045
	有意確率	0.732	0.280	0.511
	N	233	223	218

太字は、 $p < 0.05$ の係数

表 5 は、就職活動量を従属変数とした重回帰分析の結果である。モデル 1 は性別と学科を投入したモデルであり、モデル 2 は職業的価値意識を加えたモデルである。なお分析に使用するダミー変数は、性別は女性を基準とし、学科は社会福祉学科を基準としている³。

モデル 1 からは、性別が就職活動量に影響していないことや、社会福祉学科と比べ、社会学科、メディア学科、産業関係学科の就職活動量が多いことが読み取れる。職業的価値意識を加えたモデル 2 からは、安定志向とステータス志向の 2 つも就職活動量に効果もつことがわかる。安定志向やステータス志向が強まることによって、就職活動の量は多くなるのである。表からは、産業関係学科の効果がモデル 2 で弱まっており、5%水準では有意とはいえなくなっていることも読み取れる。産業関係学科の学生は安定志向・ステータス志向が強く、安定志向やステータス志向が強いほど就職活動量が増すため、こうした結果が生じたものと考えられる。

³ 以降の重回帰分析で用いられるダミー変数は、すべて同様の方法をとっている。

表 5 就職活動量についての重回帰分析

	モデル1		モデル2	
	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率
性別 (女=0) (基準: 社会福祉学)	-.026	.704	.014	.843
社会学	.234	.007	.272	.001
メディア学	.304	.000	.313	.000
産業関係学	.200	.015	.142	.088
教育文化学	.013	.869	.029	.695
安定志向			.256	.000
ステータス志向			.143	.035
やりがい志向			.045	.494
有意確率	.005		.000	
R ²	.076		.157	
調整済みR ²	.055		.124	

N=218

太字は、 $p < 0.05$ の係数

3.2 内定数

次に、内定数について見ていこう。調査には、いくつかの企業から内定をもらったかをたずねた問いがあり、回答者は内定をもらった企業数を実数で回答するよう求められている。表 6 は、内定数の平均を、性別および学科ごとにみたものである。

ここから、性別や学科が内定数とあまり関連していないことがわかる。一般に、就職活動において女性は男性よりも困難な状況にあるといわれるが、内定数で見ると、社会学部においてはあまり男女差がないようである。また、他の学科よりも就職活動量の少ない社会福祉学科や教育文化学科の学生も、他学科の学生と同じくらい内定をもらっている。

表 6 性別・学科ごとの内定数の平均

		内定数	有意確率
全体		1.680	
性別	男	1.630	
	女	1.730	0.522
学科	社会学	1.670	
	社会福祉学	1.810	
	メディア学	1.700	
	産業関係学	1.560	
	教育文化学	1.610	0.858

表 7 は職業的価値意識と内定数の相関を示したものである。ここから、ステータス志向と内定数の間に正の相関があることがわかる。社会的ステータスの高い企業に就職するこ

とを重視するほど、多くの企業から内定をもらう傾向があるのである。安定志向ややりがい志向については、内定数との間に相関がみられない。

表 7 職業的価値意識と内定数の相関

		内定数
安定志向	相関係数	-0.012
	有意確率	0.842
	N	266
ステータス志向	相関係数	0.183
	有意確率	0.003
	N	266
やりがい志向	相関係数	0.060
	有意確率	0.332
	N	266

太字は、 $p < 0.05$ の係数

表 8 は、内定数を従属変数とした重回帰分析の結果である。モデル 1 は性別と学科を独立変数としたモデルであり、モデル 2 はそれに就職活動量を加えたモデル、モデル 3 はさらに職業的価値意識を加えたモデルである。

モデル 1 からは、性別と学科が内定数にほとんど何の影響も与えていないことがわかる。次にモデル 2 を見ると、就職活動量が内定数にプラスの効果をもつことがわかる。就職活動をたくさんおこなうことによって、企業からもらう内定の数は多くなる。モデル 3 からは、就職活動量に加え、ステータス志向も内定数に影響していることが読みとれる。社会的ステータスの高い企業に就職することを目指し、たくさん就職活動をすることで、内定数は多くなるのである。

表 8 内定数についての重回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3	
	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率
性別 (女性=0) (基準: 社会福祉学)						
社会学	-.054	.541	-.118	.175	-.153	.087
メディア学	.020	.818	-.063	.465	-.102	.247
産業関係学	-.063	.461	-.118	.159	-.154	.074
教育文化学	.001	.985	-.002	.979	-.032	.680
就職活動量			.275	.000	.261	.000
安定志向					-.062	.394
ステータス志向					.178	.012
やりがい志向					.037	.585
有意確率		.913		.009		.003
R ²		.007		.077		.110
調整済みR ²		-.016		.050		.071

N=218

太字は、p<0.05の係数

3.3 進路満足度

次に、進路満足度に関する分析へと進もう。調査には「あなたは卒業後の進路に満足していますか、それとも不満ですか」という問いが用意されており、「満足」「どちらかといえば満足」「どちらともいえない」「どちらかといえば不満」「不満」の5つから回答がもとめられている。「満足」に5点、「どちらかといえば満足」に4点、「どちらともいえない」に3点、「どちらかといえば不満」に2点、「不満」に1点を与え、この得点を進路満足度に関する尺度としよう。表9は、性別および学科ごとに進路満足度の平均を見たものである。

ここから、男性に比べ女性の方がやや進路への満足度が高いことがわかる。学科については、進路満足度とあまり関連しないようである。

表 9 性別・学科ごとの進路満足度の平均

		進路満足度	有意確率
全体		4.123	
性別	男	4.007	
	女	4.225	0.069
学科	社会学	4.077	
	社会福祉学	4.165	
	メディア学	4.258	
	産業関係学	4.000	
	教育文化学	4.059	0.707

表 10 は職業的価値意識と進路満足度の相関を示したものである。表からわかるように、安定志向とステータス志向は、進路満足度との間に相関がみられない。それに対して、やりがい志向と進路満足度との間には正の相関がある。仕事にやりがいを求める意識が強いほど、進路に対する満足度は高くなるのである。

表 10 職業的価値意識と進路満足度の相関

		進路満足度
安定志向	相関係数	0.036
	有意確率	0.549
	N	276
ステータス志向	相関係数	-0.052
	有意確率	0.393
	N	276
やりがい志向	相関係数	0.224
	有意確率	0.000
	N	276

太字は、 $p < 0.05$ の係数

表 11 は、進路満足度を従属変数とした重回帰分析の結果である。モデル 1 は性別と学科を投入したモデルであり、モデル 2 はそれに就職活動量と内定数を加えたモデル、モデル 3 はさらに職業的価値意識を加えたモデルである。

モデル 1 からは、性別と学科が進路満足度に影響しないことがわかる。次にモデル 2 を見ると、内定数が多いほど進路満足度が高まること、就職活動量が多いほど進路満足度が低くなることがわかる。モデル 3 からは、就職活動量と内定数に加え、やりがい志向も満足度に影響していることが見てとれる。仕事の面白さや能力の発揮といった、仕事におけるやりがいを重視するほど、進路に対する満足度は高くなるのである。

表 11 進路満足度の重回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3	
	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率
性別 (女=0) (基準: 社会福祉学)	-.027	.708	-.029	.671	.004	.957
社会学	-.030	.735	.034	.697	.091	.303
メディア学	.021	.809	.078	.370	.103	.233
産業関係学	-.012	.890	.048	.567	.121	.154
教育文化学	-.038	.633	-.035	.646	-.013	.859
就職活動量			-.202	.005	-.223	.002
内定数			.294	.000	.303	.000
安定志向					.082	.246
ステータス志向					-.101	.149
やりがい志向					.246	.000
有意確率	.981		.003		.000	
R ²	.003		.097		.165	
調整済みR ²	-.020		.067		.124	

N=218

太字は、p<0.05の係数

4 職業的価値意識と大学生生活

ここまで、学生のもつ職業的な価値意識のありようが就職活動にさまざまな影響をもたらすことを明らかにしてきた。ではそもそも、学生たちの職業に対する意識はどのようにして形成されるのだろうか。ここからは、学生たちの送った大学生活の中身に注目しながら、大学での諸経験や大学で身に付けた教養などが、学生のもつ職業的価値意識にどう結びついているのかを明らかにしていこう。

4.1 大学生活での諸経験

まず、大学生活でのさまざまな活動経験と職業的価値意識の関係について見ていこう。今回の調査には、さまざまな活動を在学中にどの程度おこなったかをたずねた項目がある。表 12 は、「部活・サークル活動」「ボランティア活動」「学問的な本を読む」「小説を読む」「美術館や博物館へ行く」の 5 つについて、「よくした」に 4 点、「ときどきした」に 3 点、「あまりしなかった」に 2 点、「しなかった」に 1 点を与え、各項目の得点と職業的価値意識の相関を見たものである。

表から、安定志向はこれら 5 つの活動の経験と相関が見られないことがわかる。ステータス志向については、学問的な本を読んだ経験との間に負の相関がある。学問的な本を読む機会が少ないほど、社会的ステータスの高い企業に就職したいという意識は強くなるのである。

表 12 大学生生活での諸経験と職業的価値意識の相関

		安定志向	ステータス志向	やりがい志向
部活・サークル活動	相関係数	0.109	0.067	0.127
	有意確率	0.062	0.256	0.030
	N	293	293	293
ボランティア活動	相関係数	0.061	-0.105	0.195
	有意確率	0.301	0.072	0.001
	N	292	292	292
学問的な本を読む	相関係数	0.034	-0.159	0.183
	有意確率	0.561	0.007	0.002
	N	292	292	292
小説を読む	相関係数	0.040	-0.024	0.098
	有意確率	0.495	0.682	0.094
	N	293	293	293
美術館や博物館へ行く	相関係数	-0.056	0.082	0.140
	有意確率	0.344	0.161	0.016
	N	292	292	292

太字は、 $p < 0.05$ の係数

やりがい志向については、部活・サークル活動の経験、ボランティア活動経験、学問的な本を読んだ経験、美術館や博物館へ行った経験と正の相関がある。有意とはいえないが、小説を読むこととやりがい志向の間にも、弱い正の相関関係がある。やりがい志向に関連するこれらの活動は、内容でみれば互いに異なったものである。ただ、これらの活動には共通する部分もある。これらの活動はいずれも、なんらかの目的のために手段としてなされる活動というより、それ自体に楽しさや満足がともなう活動である。こうした充足的な活動を多く経験することで、やりがいのある仕事が見たいという意識は強くなるのである。

4.2 教養の深まり

次に、大学生生活で身につけられたさまざまな教養と職業的価値意識の関係について見ていこう。調査では、表 13 に見られるようなさまざまなことがらに対する理解が、入学時と比べてどの程度深まったかがたずねられている。表 13 は、理解が「深まった」場合に 4 点、「どちらかといえば深まった」場合に 3 点、「あまり深まらなかった」場合に 2 点、「深まらなかった」場合に 1 点を与え、各項目の得点と職業的価値意識の相関を見たものである。

まず安定志向について見ると、安定志向は教養の深まりとはあまり関連していないことがわかる。次にステータス志向について見ると、政治や経済のメカニズムに対する理解の深まりがステータス志向とプラスに関連していることがわかる。政治や経済に対する理解が深まるほど、社会的ステータスの高い企業に就職したいという意識は強くなるようである。やりがい志向については、さまざまな項目との間に関連が見られる。表からわかるように、社会のメカニズム、哲学や思想、人間の心理、異文化、マイノリティに対する理解

の深まりは、やりがい志向と正の相関がある。有意とはいえないが、その他の項目もやりがい志向と正の相関関係にあることがわかる。大学生活を通じてさまざまな教養が深まることで、やりがいのある仕事がしたいという意識は強くなるのである。

表 13 教養の深まりと職業的価値意識の相関

		安定志向	ステータス志向	やりがい志向
社会のメカニズムについての理解	相関係数	-0.013	0.066	0.147
	有意確率	0.831	0.257	0.012
	N	293	293	293
政治のメカニズムについての理解	相関係数	0.027	0.129	0.070
	有意確率	0.643	0.028	0.234
	N	293	293	293
経済のメカニズムについての理解	相関係数	0.020	0.148	0.108
	有意確率	0.733	0.011	0.066
	N	293	293	293
哲学や思想についての理解	相関係数	0.002	0.000	0.131
	有意確率	0.969	0.997	0.025
	N	293	293	293
人間の心理についての理解	相関係数	0.002	-0.103	0.254
	有意確率	0.978	0.079	0.000
	N	292	292	292
さまざまな文学作品についての理解	相関係数	0.056	0.037	0.082
	有意確率	0.339	0.523	0.161
	N	293	293	293
美術や音楽などの芸術についての理解	相関係数	0.043	0.044	0.103
	有意確率	0.459	0.449	0.078
	N	293	293	293
異文化への理解	相関係数	0.018	0.022	0.153
	有意確率	0.753	0.705	0.009
	N	293	293	293
マイノリティへの理解	相関係数	0.098	-0.029	0.287
	有意確率	0.093	0.621	0.000
	N	292	292	292

太字は、 $p < 0.05$ の係数

4.3 大学観・教員観

表 14 は、大学や教員についての意識と職業的価値意識の相関を見たものである。ここから、教員が学問の面白さや興味深い知識を教えてくれたと感じている学生ほど、やりがい志向が強いことがわかる。また、「大学に来て教養の大切さがわかるようになった」という意識もやりがい志向と正の相関がある。それに対して、「学問的な知識よりも実用的な知識が重要」という意識や、「大学でもっと実用的な知識を教えるべき」といった意識はステータス志向に関連している。ステータス志向が強いほど、学問や教養よりも実用的な知識を求めるようになるのである。

表 14 大学観・教員観に関する意識と職業的価値意識の相関

		安定志向	ステータス志向	やりがい志向
学科の教員は学問の面白さを教えてくれる	相関係数	0.113	-0.005	0.194
	有意確率	0.054	0.935	0.001
	N	292	292	292
学科の教員は興味深い知識を教えてくれる	相関係数	0.091	0.000	0.171
	有意確率	0.121	0.999	0.003
	N	292	292	292
同志社大学に来て、学問や教養の大切さがわかるようになった	相関係数	0.134	-0.010	0.175
	有意確率	0.024	0.866	0.003
	N	286	286	286
大学では社会に出てすぐ活かせる知識をもっと教えるべきだ	相関係数	0.072	0.142	0.049
	有意確率	0.226	0.016	0.413
	N	285	285	285
学問的な知識よりも実用的な知識が重要だ	相関係数	0.079	0.213	-0.061
	有意確率	0.180	0.000	0.300
	N	286	286	286

5 おわりに

本稿では、学生のもつ職業的価値意識について検討してきた。分析からはさまざまなことが明らかになったが、特に興味深いと思われるのは、社会的地位の高い企業に就職したいというステータス志向や、仕事の楽しさや能力の発揮を求めるやりがい志向について得られた知見である。

分析から明らかにされたように、ステータス志向が強まることによって、学生は就職活動をたくさんするようになり、企業からもらう内定数も多くなる。しかし、仕事を通じて社会的ステータスの獲得を求める意識は、学問をおろそかにし、実用的に役立つ知識を追い求めることにもつながっている。近年、就職活動の早期化や長期化が大学教育を圧迫していることが指摘されているが、こうしたことの背後にあるのも、学生のステータス志向の強さなのかもしれない。

また分析からは、教養の深まりや学問の面白さの実感がやりがい志向を強めること、そして、やりがい志向が強い人ほど最終的に満足いく進路を手に行っていることが明らかにされた。「大学は学生に学問を教えたり教養を身につけさせているだけではダメで、就職サポートもしっかりしなければならない」といった主張を最近よく聞く。学生が就職を前に直面している厳しい状況を鑑みれば、こうした主張がなされるのも理由がないわけではない。しかしわれわれは、教養の深まりや学問の面白さの実感がやりがい志向を媒介し、進路への満足度を背後から支えている可能性があることについてもよく認識しておかなければならないだろう。

